

「昭和 23 年の学制改革に遭遇した世代の『思い出の記』(その 9)」

《 相馬中学校に入学し相馬高校卒業となる等 》

懐かしい「小高郷友区」^(※1)高普 4 回卒 石橋 武^(※2)

郷友区といっても、高校になってから入学した後輩には分からないだろうが、昭和 13 年の勤労奉仕令によって旧制中学校以上の学徒に義務づけられた地域団体の名残りである。旧制中学校最後の一年間だけだったが、運動会や記念日行事など何をやるにも、小高、原町、鹿島、中村、新地といった郷友区単位だった。それだけに結束は固く、先輩もよく面倒を見てくれた。

原ノ町駅の一つ南に磐城太田という駅がある。そこから以南の小高、浪江、富岡、広野・・・と広範囲が「小高郷友区」である。磐城太田は、今では無人駅で、停まる電車も少ないが。その頃は、今のようないもモータリゼーションも未発達で、結構、乗降客も多かった。私が相中から相高の 6 年間通学した駅である。

入学したのは終戦の翌年の昭和 21 年 4 月である。小学校の頃は兵隊さんになることだけを考えていたので、夏休みに雑音混じりの詔勅を聞き、父に「負けた」と教えられた時は、裏の河原で陽が暮れるまで泣き続けた。根っからの軍国少年だった。2 学期の学校が始まっても、勉強は手につかず、ただぼんやりと過ごした。3 学期始めに担任の先生から「中学を受験してみないか」と言われたが、余り乗り気ではなかった。

当時、相中といえば、私の村の小学校から年に一人受かるかどうかの秀才校だった。どうせ駄目だろうと思って、東京から疎開していた大和田亨君と二人で受けてみた。担任に連れられて発表を見に行ったら、二人とも受かっていた。余り感激はなかったが、帰りに先生に奢ってもらった「カツ丼」の味には感動した。田舎の百姓の子供には初めての味である。世の中にこんな旨い物があるのかと涙が出そうだった。

戦後は何も無い。服はもちろん、帽子も履物もカバンもみんなばらばら。私達は小学校から高校まで制服、制帽を知らない。それでも金ピカの校章と白線 2 本の帽子を被って颯爽と相中へ通学した。道で出会う人ごとに「中学に入ったのか、おめでとう」と言われ、悪い気はしなかった。

あの頃、磐城太田から中村まで列車で小一時間かかった。通学は上野発の朝 6 時過ぎの一番列車だった。外地からの引揚者や復員軍人、買い出しの人でいつも満員。客車の車内に乗った事がなかった。特に原ノ町までは車両と車両の連結器に足をかけ、デッキの取っ手に掴まる。駅近くのポイントではかなり揺れる。石炭カス、煤煙で顔もシャツも真っ黒になる。特等席は機関車の前だが、常に上級生が占拠している。

楽しいこともあった。進駐軍の列車が交換待ちで磐城太田のような小さな駅にも停まることがある。恐る恐る近寄ってカタコト英語でしゃべるとチョコレート、ガム、タバコ等が貰える。英会話の勉強には大いに役立った。

大体、乗る車両も決っていた。先頭から相中、原町商、相農、相女、原女の順。中村駅に降りてからも相女（バンクと言った）とは通学路も違っていた。我々は駅から真っ直ぐ行くが、バンクは大町経由である。七十七銀行の向いに叔母が居て、託かり物を届けにどうしても大町通りを通ることになる。それが見つかると、学校に着いた途端、上級生の教室に呼び出される。かなりヤキを入れられた頃に、郷友区の先輩が「もう良いだろう」と中に入れてくれる。入学したばかりの時、武道場（のちの体育館）で鬼ごっこをやっていたら、飛行服を着た予科練帰りの先輩が来て、整列させられ、竹刀でヤキを入れられたこともあった。

中学2年の時、学制改革で併設中学となり、下級生が入って来ない。中学3年間と高校1年生の4年間で最下級で通した。それだけにわが学年は団結心も強いし、悪戯もした。下級生が居ない分、生徒数も少なくなり、空教室も多かったのも、机や椅子など冬のストーブ燃料には不自由しなかった。

野球全盛期だった。休み時間は北庭のあっちこっちで三角ベースの野球が始まる。昂じて中学3年生の時に軟式野球部を結成した。部長は鈴木琢磨^(※3)先生。高校2年生まで続け、会津国体に出場、ベスト8ぐらいまで勝ち進んだ。先輩の硬式野球部の応援にもよく駆り出された。中学1年の時、双葉中学で磐城中学との対戦が思い出される。双葉に近かったこともあって応援に行った。わが軍は投手・石川幸道^(※4)、捕手・小池某^(※5)だったと思う。結果はコールドゲーム。涙ながらに応援歌其の3「馬陵城頭月冴えて・・・」を歌った記憶がある。

毎年、関西馬城会で校歌、応援歌を歌うが、先輩たちといつも口に出るのは「一度で良いから“甲子園”で目いっぱい校歌を歌いたかった」と・・・。関西にいる馬陵健児は皆んなそう思っている。我々の時代には叶えられないのだろうか。

私達が卒業した後、「小高郷友区」から相高へ通学している者は殆どいない。母校のために、後輩のために「伝統の灯を消さないで欲しい」と思う気持ちは人一倍強い。郷里に後輩が少ないのが、何となく空しさを覚える。学区制を廃止し、母校がせめて県下No. 1の魅力ある高校に発展することを祈るのみである。

(※1) 創立110周年記念誌『紅の旗』(2009(平成21)年1月発行)の「思い出の記」より。

(※2) 昭和27(1952)年卒、太田出身。

(※3) 昭和16(1941)年卒、相中第39回、太田出身。

(※4) 昭和24(1949)年卒、相高普第1回、原町出身。

(※5) 会員名簿からの類推→小池譲治、昭和25(1950)年卒、相高普第2回、東京都出身。